

40th Anniversary

本編は『ロータリーの友』2007年11月号～2008年6月号
“よねやまだより”に掲載した「よねやまの歴史をたずねて」①～⑧をまとめたものです。

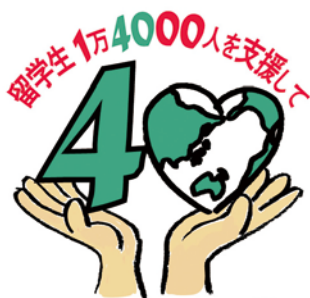


2007年7月、ロータリー米山記念奨学会は 財団設立40周年を迎えました

これまでに支援した外国人留学生1万4,000人は
世界へとはばたき、日本との懸け橋として活躍
しています。私たちはこれからも歩み続けます。
未来の親善大使を育て、
世界の平和に貢献するために。



ロータリー米山記念奨学会 財団設立40周年



ロータリー米山記念奨学会 財団設立40周年

よねやまの歴史をたずねて①

奨学事業に賭けた夢

—— 東京RCと第1号米山奨学生 ——

ロータリー米山記念奨学会財団設立40周年を記念し、今年度の「よねやまだより」では、これまで米山奨学事業にかかわったロータリアンや奨学生を紹介しながら、その半世紀にわたる歴史を振り返る新シリーズをお届けします。今回は、事業の前身となった米山基金創設時のエピソードを取り上げます。

タイからの第1号奨学生

1954年9月28日、横浜港に到着した第三満鉄丸の船上にその人の姿はありました。9月20日にタイ・バンコクを出航してから1週間余。途中、台風で到着が数日遅れたものの、元気にタラップを降りて現れ、出迎えた東京ロータリークラブ（RC）の人々との初対面を無事に果たしました。名前はソムチャード・ラタナチャタさん。東京RCが始めた米山記念奨学金による初の奨学生でした。彼が日本の大地を踏みしめたとき、五十有余年に及ぶ米山奨学事業の第一歩が記されたのです。

遺徳を讃える“無形の金字塔”に

その2年前の1952年11月4日、東京RCでは、古沢文作会長がある試案を発表していました。それは、日本ロータリーの礎を築き、その発展に偉大な足跡を遺した故米山梅吉氏の遺徳を記念して「米山基金」をつくり、アジア地域の優秀な学生を日本に招いて、2年間研究させようというものでした。

この日提出された「米山記念奨学金（略称・米山ファンド）設定の趣旨」の最後の一文に、この構想にかける古沢氏の並々ならぬ意気込みを見ることができます。

「これ実に翁の生前意図されたロータリー事業の一つであり、われらまたもって翁の遺徳を讃^{たた}える無形の金字塔となさんとするものであります」

若き日に大志を抱いてアメリカに留学し、実業家として大成してからは、向学心に燃える多くの青年に陰ながら援助の手を差し伸べ、晩年には私財を投げ打って児童教育に力を注いだ米山梅吉翁。この奨学事業こそ翁の遺志を継ぎ、その功績を永く顕彰するのにふさわしいという確信が会員たちにはあったのでしょう。12月3日、米山基金構想は、ほぼ原案通りに承認されました。

早速、米山奨学金特別委員会が設けられました。それ



奨学事業の創設に心血を注いだ古沢文作氏

奨学生招へいのためにバンコク・東京両RCで交わされた書簡など貴重な委員会資料



は、委員長となった古沢氏の指揮のもと、総務部、財務部、渉外部、審査部、学事部の5部からなる総勢52人もの大規模な組織でした。

まず当面の課題は、寄付を募って基金をつくること。会員から1口1,000円以上、会員の企業からは1口1万円以上で任意の寄付を募りました。当時は、大卒初任給が8,000～9,000円の時代。国内の食糧事情もはかばかしくなく、豊かさとはまだほど遠い時代でしたが、事業の趣旨は多くの会員の賛同を得、寄付は順調に集まりました。財務部の委員たちの懸命な努力のかいもあって、個人寄付は目標の170%を超えて、2年後には約270万円が集まりました。

バンコクからの吉報

寄付金集めと並んで、大きな課題となったのは、奨学生の人選です。タイとビルマ（現在のミャンマー）から各1人を招へいすることとし、それぞれバンコクRCとランゲーンRCに書簡を送って、ふさわしい奨学生候補者を選んでくれるよう依頼しました。

ランゲーンRCでは候補者は選ばれたものの、奨学生の来日は果たせませんでした。一方、バンコクRCの方は順調で、1954年5月7日付の書簡で、最終候補者と

してソムチャード・ラタナチャタさんの名前が東京RCに報告されました。

ソムチャードさんは、バンコク近郊のカセサート大学で農学士号を取得したばかりの25歳。米作農家だった父はすでに亡く、母は生活のために土地も手放してしまい、小学校教員の兄からわずかな援助があるものの、大学の学費はほとんど自分で工面した苦学生でした。

彼を選んだ理由を、バンコクRCの国際担当理事、ニコライ・ギールミデン氏は「農業への愛情と忍耐強さ、そして留学して得た知識を国の発展に生かしたいという明確な意志をもっている」と説明しています。米山委員会の意をくんだ人選に否のあろうはずがなく、古沢氏はバンコクRCへ、喜びと感謝の手紙を送っています。

人生最後の奉仕の実践

いよいよ奨学生が決まると、受け入れ大学や宿舎探し、ビザの申請、日本までの船の手配などが始まりました。各担当部門のロータリアンが駆け回った結果、東京大学農学部の研究生としての受け入れと、新宿区にある国際学友会への入寮が決まりました。日本語の学習経験がほとんどないソムチャードさんのため、半年間、国際学友会で日本語の授業を受ける手はずも整えました。

そして、待ちに待ったソムチャードさんの来日。米山委員会のすべてのメンバーが、大きな感動と喜びでこの日を迎えたであろうことは想像に難くありません。

気がかりは、ソムチャードさんの大学院修士課程入学。しかし、誰よりもそのことに心を砕き、献身的な支援を続けた古沢委員長は、その後しばらくして病に倒れます。

1955年1月9日、自宅療養中の古沢氏から新田義実委員にあてた手紙は、病床にあってなお、彼の入試のことを心配する心情にあふれたものでした。

「(中略) ソムチャードの大学院入学準備にかかる時期が迫りました。年明けと共にソムチャードを再び有賀博士の許に同行し、同博士より西ヶ原の蚕糸試験所にご紹介を受け、ソムチャードは国際学友会における日本語レッスン終了後、毎日または時間の許す限りしばしば同試験所を見学して、3月末の大学院入学の際の参考資料を得せしめたい次第でございます」



東京RC例会でのソムチャードさん(右)

古沢氏といえば、1928年にロータリーの倫理訓を5か条にまとめた「大連宣言」でその名を知られる優れた思想家でもあります。その古沢氏が最後に情熱を傾け、奉仕の実践に取り組んだのが米山奨学事業でした。

1955年7月19日、古沢氏は自らが発起した奨学事業の行く末を見届けることなく、74年の生涯を閉じました。彼が最後まで思いをかけた第1号米山奨学生のソムチャードさんは、その後無事に東京大学農学部の修士課程に入学。卒業後は帰国してタイの蚕糸局に入局し、タイシルクの増産に貢献。蚕糸局の重要なポストを歴任して、1990年に没したと伝えられています。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281

Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

* よねやまニュース *



感動のスピーチを行った金さん

日韓親善会議で米山奨学生が感動のスピーチ

今年9月8日、第9回ロータリー日韓親善会議で米山奨学生の金静希さん(東京大学大学院/東京日本橋RC)が壇上に立ち、スピーチをしました。

「身を削って奉仕活動をするロータリアンの生き方を、亡き祖父母の姿に重ね合わせて見ている」と話した金さん。近年の日韓関係に触れながら、「自分がそうであるように、他人もまた良い部分も悪い部分も併せもった弱い存在であると認識できるなら、乗り越えられない紛争はなく、受け入れられない他人はいない」と結び、会場から万雷の拍手を受けました。韓国語で話されたスピーチを、関博子氏(第2750地区米山奨学委員長)の通訳で耳にした日本のロータリアンたちは、「涙が出て、反省させられた」「真摯な生き方に感動した」と口々に語り、壇上から降りた金さんを日韓両国のロータリアンたちが取り囲んで、次々と賛辞を贈りました。



よねやまの歴史をたずねて②

奨学生への愛情と祈り

—— 米山基金の成功と終幕 ——

米山奨学事業の歴史を振り返るシリーズの2回目は、東京ロータリークラブ（RC）によって設立された米山基金が、所期の目標を達して終わるまでを描きます。全国規模への拡大を見据えて事業の道筋をつけたロータリアンたち。この事業へ賭けた彼らの熱意、そして奨学生へ注いだ愛情を、今、私たちは継承しているのでしょうか。

もう1人の米山奨学生

「あと1人を、どうしたものか……」

1952年に東京RCによって着手された米山基金構想では、タイとビルマ（現ミャンマー）から留学生を1人ずつ招へいするはずでした。タイからは、バンコクRCの推薦を受けたソムチャード・ラタナチャタさんが1954年9月に来日。ところが、ビルマからの候補者来日が頓挫したため、別の候補者探しに頭を悩ませていました。

そんな折、東京大学大学院修士課程で水産資源学を学んでいたインド人留学生、P. K. イーペンさんが、大学の指導教授とインドのナジャーコイルRCから推薦されてきました。米山基金の生みの親、古沢丈作氏の後を継ぎ、米山奨学金特別委員会委員長に就任した穂積重威氏をはじめ委員たちは、イーペンさんを「成績優秀な上に、人物もなかなかしっかりしており、バックボーンが一本通った好青年」と歓迎。1955年1月から奨学金を支給することを決めました。

将来はフルブライト奨学金のように

これが思わぬヒントになりました。海外から奨学生を招致するには、書簡の往来に相当な時間を費やす上、大

学への入学手続き、渡航や入国、宿舍の世話など、膨大な労力が必要です。しかし、すでに日本で学ぶ留学生から選ぶのであれば、煩雑な手続きもなく確実に選考することができ、予算も立てやすいことがわかりました。

「第一期事業が成功して確信を得たる場合には、此事業を公開して広く日本全区のロータリー倶楽部に呼びかけ、此事業を米国の人事交流のフルグライトや他のスカラシップ制度の如き大規模のものにして、米山翁の名に於いて国際親善に大きなサービスをしたいと念願して居る」（1955年9月、穂積氏から第60地区ガバナーへあてた手紙を、原文のまま表記）

将来は、アメリカのフルブライト奨学金のように——。そう考えていた彼らにとって、全国規模へ発展させるためにも、在日留学生から奨学生を選考する方策が現実的であると考えたのです。

日本を愛したイーペンさん

委員たちの熱心な呼びかけもあって、ソムチャードさんとイーペンさんには全国から招待の申し出がありました。また、米山奨学金特別委員会でも、彼らの研究に沿った視察旅行を計画。ソムチャードさんには養蚕の実地研修、イーペンさんには北海道、静岡県の沼津、三重県の鳥羽などでマグロ漁業や真珠養殖を見学させるなど、全国行脚を展開しました。各地のクラブが心をくだいて彼らを歓待した様子が当時の手紙に残されています。

そんなロータリアンを、日本を、イーペンさんは心から敬愛していました。

1955年10月1日未明、新潟市で火災が発生。折からの強風にあおられ、壊滅的被害を受けたというニュースが報じられました。翌2日付でイーペンさんから東京RCに1通の手紙が届きました。中には、1,000円の銀行手形が添えられていました。



写真は左から、新田義実氏、ソムチャードさん、イーペンさん、穂積重威氏

「どうぞこのお金を新潟へ送ってください。わずかな金額ですが、愛する日本の同胞へ私の祈りが伝わればうれしい」

また、がんに倒れ、日本で孤独な入院生活を送っている留学生がいると聞くと、彼はすぐに周囲の留学生仲間呼びかけ、毎日交替で病床を見舞ったというエピソードも残されています。1957年6月10日の帰国を前に、イーペンさんは次のように心情をつづっています。

「将来、私がロータリアンとなる幸運をつかめるかどうかは、まだわかりません。しかし、どうなるうとも、私の前にはいつもロータリーの綱領があり、私の後ろにはロータリーの歯車があることでしょう。すばらしい国、すばらしい人々との永遠の思い出を、祖国の同胞だけでなく、すべての人々に伝えたい」

イーペンさんの帰国後も、東京RCでは週報を送り続け、彼からもたびたび近況を知らせる手紙が届きました。その中に、南インドで政府の水産局に就職が決まった、との報告が記されています。

全国展開への胎動と米山基金の終幕

イーペンさんの帰国が予定よりも早まったため、東京RCは残った資金でもう1人の留学生を支援することにしました。母国からの資金援助が打ち切れ、志半ばにして帰国しようとしていたインド人留学生、A. B. ロイさんです。同国人であるイーペンさんの熱心な働きか



イーペンさんから届いた手紙の数々

けもあり、ロイさんは1年間の奨学金を受けて、無事に東京大学で学士号を取得することができました。

1958年3月、ソムチャードさん、そしてロイさんの卒業をもって東京RCによる米山基金は終了します。3人の留学生へ計270万円の奨学金を支給し、成功への手ごたえをつかんでの幕引きでした。そして、このときすでに、全国展開に向けた新たな組織の胎動が始まっていたのです。

同年9月25日、ソムチャードさんがタイへ帰国。同日付で新田義実氏（東京RC）からバンコクRCへあてられた手紙には、この事業に賭けたロータリアンたちの、奨学生への愛情と祈りがにじみ出ています。

「いよいよソムチャードさんが日本での勉強を終え、帰国します。われわれが彼に期待することはただ1つ、今後タイと日本のために活躍してくれることです。彼は4年間、日本で多くのことを学びました。楽しいことばかりではなかったと思いますが、人間は基本的に同じであるとわかってくれたはずです。これは、ロータリーにおけるわれわれの信念であり、人は世界の人々と友情を育むことができるのだと、われわれは証明したいのです。今からソムチャードさんはあなた方の元へ帰ります。あなた方は彼を誇りに思ってくださいることでしょうし、彼も注いだ愛情には応えてくれるはずです。必ずやソムチャードさんはロータリー精神をもった人間へと成長するに違いありません」

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281
Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

* よねやまニュース *

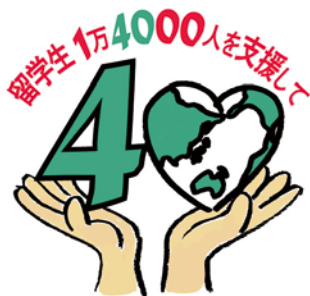


新潟の被災地支援を提案した阮氏

中越沖地震に台湾学友会から義援金

7月に発生した新潟県中越沖地震は、台湾でも大きく報道されました。そのニュースを受け、台湾の米山学友会が立ち上がりました。(社)中華民国扶輪米山会(台湾米山学友会)の阮允恭理事長(1971-74/神戸大学大学院/神戸RC)は、9月の理事会で中越沖地震への義援金送付を提案し、全会一致で承認。呼びかけを始めると多くの学友から手が上がり、1週間で目標額30万円に達しました。阮理事長は「地震の怖さ、復興までの道のりの長さや辛さは私たちもよく知っています。1999年の台湾中部の大地震の救援に、日本から多くのボランティアが駆けつけてくれたことは忘れられません」と、寄付に込めた思いを語ってくれました。

台湾学友会は、2004年の中国地震の際も30万円の義援金を送っています。なお、両義援金とも、第2560地区(新潟県)に寄付されました。



ロータリー米山記念奨学会 財団設立40周年

よねやまの歴史をたずねて③

全国展開、始まる

—— 単独事業から多地区合同の事業へ ——

東京ロータリークラブ（RC）による米山奨学事業の成功は、クラブ内にとどまらず、いくつもの地区を動かして戦後の日本ロータリー初となる全国組織の設立を実現します。今回は、“よねやま”の歴史上、大きなターニングポイントとなった「ロータリー米山奨学委員会」発足の過程を紹介します。

開かれた全国への扉

「奨学金を設けて、外国人留学生を支援する」

このシンプルで明確な意義をもつ米山奨学事業は、当時のロータリアンの心をとらえました。東京RCが迎えた2人の米山奨学生、タイ出身のソムチャード・ラタナチャタさんとインド出身のP. K. イーペンさんは、日本各地のクラブに歓迎され、彼らの行く先々で親善と交流の輪が広がりました。

そして、東京RCの米山委員会が事業の成功に確かな手応えを感じ始めたころ、ついに米山奨学事業の全国展開の扉が開かれたのです。

2つの地区大会で支援決議

1956年10月7日、宮城県仙台市で開かれた第60区（東京以北の東日本全域）年次大会で、「米山奨学資金に関する件」と題する決議がなされました。

「（前略）斯様な企画は貴いものであり、且つロータリーの国際奉仕として最もふさわしい企であつて、その連続性が望ましい。猶お斯様な企画を継続するには、単一クラブでは負担が重すぎ、又単一クラブに任しておくには余りに宏大なるものであるから、60地区における全ク

ラブは米山奨学資金制度を一層広範囲のものとし、その制度の確立を期し、その責任の一端を負担する意志を表示している。依つて本大会は、米山奨学資金を財団法人として、全国的な組織となすべきことを茲に決議する」（1956—57年度第60区年次大会報告より）

続いて、その翌週に神奈川県横浜市で開かれた第62区（神奈川～岐阜・三重）の年次大会でも、同様の決議がなされました。クラブ単独の事業から、多地区合同の事業へ。米山奨学事業の飛躍の原点がここにありました。創設当初からの願いが、米山基金の生みの親である古沢丈作氏の構想発表から4年、タイから奨学生を迎えてから2年を経て実現したのです。

余談ですが、両大会に国際ロータリー（RI）会長代理として招かれたのは、1954—55年度のRI会長で、「四つのテスト」の創案者として名高いハーバートJ. テーラー氏でした。第60区の大会のあいさつの中で、テーラー氏は米山奨学事業に触れ、東京RCの功績をたたえて、感謝の意を表した記録が残されています。

月にたばこ一箱を節約して

これらの地区大会での支援決議は、最初から財団法人の設置を前提としていた点に特徴がありました。そして1956年12月19日、新たな募金活動が始まりました。

当時は、たばこのピース（10本入り）が1箱40円。そこで、“月にたばこ一箱を節約して”を合言葉に、会員一人あたり月額50円として、半期に300円の支援を依頼する形を取りました。

1957年9月、初の全国組織となる「ロータリー米山奨学委員会」が発足。参加クラブから選出された米山奨学委員の互選で常務委員を選び、さらにその中から互選で委員長と副委員長を選出するという、現在の理事会に準じた本格的なものでした。そして初代委員長には、1957—59年のRI理事に就任したばかりの小林雅一

一九五八年に開催した米山奨学生との懇談会



初代委員長となった小林雅一氏



氏（東京 R C）が選ばれました。

小林氏は、東京 R C が 1949 年に R I に復帰した際のクラブ会長を務め、1952 - 53 年度の第 60 区ガバナー、R I 第 1 副会長などを歴任。

当時のジョージ・ミーンズ R I 事務総長からは「日本のロータリーの復活に貢献した代表的な 3 人」に名を挙げられ、1962 - 63 年度にアジア人初の R I 会長となったニッティシ C. ラハリー氏（インド・カルカッタ R C）からは「病でなければ、アジア人初の R I 会長の栄誉は小林氏に与えられていたであろう」と言われたほどの傑出した人物でした。同時に、米山梅吉翁を最もよく知る一人として、米山奨学事業の拡大と発展に心血を注いだ人でもありました。

1957 年 10 月 4 日、第 365 区・第 370 区連合年次大会の前夜懇談会で、小林氏は西日本のクラブに米山奨学事業への参加を呼びかけます。これに呼応するかのよう、関西地区のロータリークラブからの寄付金が増加し、数か月のうちに収入が倍増。こうして徐々に、支援の輪は全国に広がりました。しかし、悲願の財団化の実現には、まだこの後 10 年もの月日を要するのです。

1957 年 10 月 4 日、第 365 区・第 370 区連合年次大会の前夜懇談会で、小林氏は西日本のクラブに米山奨学事業への参加を呼びかけます。これに呼応するかのよう、関西地区のロータリークラブからの寄付金が増加し、数か月のうちに収入が倍増。こうして徐々に、支援の輪は全国に広がりました。しかし、悲願の財団化の実現には、まだこの後 10 年もの月日を要するのです。

1 粒の種から花へ

並行して、全国 19 の大学に対して奨学生の募集が呼びかけられました。そのうち 8 大学から 13 人の候補者が推薦され、1958 年 4 月 3 日の常務委員会での選考試験の結果、8 人の奨学生が選ばれました。

ロータリー米山奨学委員会が採用した初の奨学生は、

パキスタン（現バングラデシュ）、ベトナム、インドネシア、フィリピン、香港、イラン、セイロン（現スリランカ）、タイと、全員が異なる国籍で、東京にある大学だけでなく、京都大学、九州大学の学生もいました。この京都、九州の学生への奨学金の手交と交流については、それぞれ京都 R C、福岡 R C に依頼することになり、これが現在の「世話クラブ制度」の始まりとなりました。

残念ながら、記念すべきこの 8 人の奨学生に関する情報は、ほんのわずかしが残っていません。しかし、その中で唯一、インドネシア出身のヘルマン・スカルマンさんの消息が、最近判明しました。

ヘルマンさんは、東京医科歯科大学を卒業後、国家試験に合格し、日本の医師免許を取得して帰国。ジャワ島の古い城下町ソロ市の整形外科・リハビリ専門病院で長年治療にあたりました。定年退官後は、地域リハビリ教育センターの指導者となり、中央ジャワ州における「訪問リハビリ活動」のパイオニアとして、6 年にわたって障害者のリハビリ環境の向上に尽力しました。そして、2005 年に 74 歳で永眠された、ということです。

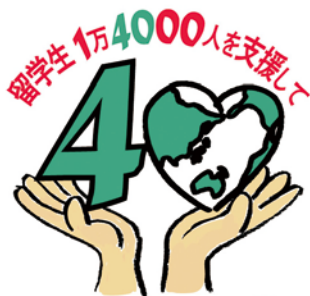
50 年前に日本のロータリアンがまいた種子は、母国インドネシアの地域医療に貢献して花開き、また母国の土に帰っていきました。しかし、彼自身がまいた種子も、この世界のどこかで花を咲かせていることでしょう。国境を超え、世代を超えて、米山奨学事業の成果は現在、そして未来に受け渡されているのです。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または“よねやまだより”についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL：03-3434-8681 FAX：03-3578-8281

E メール：mail@rotary-yoneyama.or.jp



ロータリー米山記念奨学会 財団設立40周年

よねやまの歴史をたずねて④

悲願の財団法人設立へ

—— 受け継がれた夢のたすき ——

「米山基金」設立当初からの悲願とされた財団法人設立への道のりは、長く険しいものでした。ロータリアンたちは職業奉仕の傍ら、財団法人設立にかかる膨大な手続きを行い、難色を示す文部省（現在の文部科学省）への説得を重ね、1967年、ついに「財団法人ロータリー米山記念奨学会」が誕生します。

財団法人設立は夢のまた夢

法人化を前提として結成された全国組織「ロータリー米山奨学委員会」は、1958年に第1期奨学生8人を採用して以降、翌1959年には16人、1960年には21人と、順調に採用数を伸ばしていきました。同年1月には「ロータリー米山記念奨学会」と、現在へ続く名称に変更されたほか、奨学生募集要項の制度が提案されるなど、事業は軌道に乗ったかのようでした。

その半面、財政面では常に不安を抱えた状態でした。当時は、全クラブが参加する「義務地区」とそれ以外の「任意地区」に分かれており、全国展開が実現したとはいえ、実際には未参加のクラブも多くありました。

会員1人当たり年間600円の寄付金も、義務地区においてさえ寄付率は100%にほど遠く、また、奨学期間に明確な上限がなかったため、長い人では奨学期間が5年に及ぶケースもありました。このように収支の予想がつかないなか、1か月あたりの奨学金予算25万円に対し、実際の支出が60万円にのぼったときもあり、財団法人設立のための基本財産を準備するどころか、運転資金さえ事欠く状態でした。

“神風”の到来

1961年5月、アジア初となる国際ロータリー（R I）国際大会が東京で開催されました。天皇皇后両陛下が臨席され、参加者数の新記録も樹立された盛大な大会でした。同年の新クラブ創立数は70を超え、その後、日本のロータリーは飛躍的な発展を遂げることになります。同時に、自転車操業状態であったロータリー米山記念奨学会の懐も徐々に落ち着きを取り戻し、1963年には、財団設立のための基金を積み立て始める余裕さえ、生まれました。

運営上発生するさまざまな問題は、常務委員会で討議

されました。「奨学生が東京に集中している」「台湾出身者ばかりで、それ以外の国の奨学生が少ない」「奨学生の妻帯可否」といった議論のほか、事業への関心を高めるために、当時8つに分かれていたロータリー地区すべてに副委員長を置くなど、ロータリアンとの結びつきを深めつつ、全国へ広める努力が図られました。

普通寄付金を前提に文部省を説得

これまでに幾度となく「財団化する」と明言しながら、実現に至らなかった財団法人の設立。ようやく条件が整い、認可取得が現実味を帯びてきたのは1965—66年度が始まってからでした。しかし、議論が本格化した矢先の1966年2月27日、委員長の小林雅一氏が他界しました。

小林氏はロータリー米山奨学委員会の初代委員長に就任後、R I理事なども歴任、執念とまで言われた熱意をもって、1961年の国際大会を東京へ招致した人物です。東京ロータリークラブ（RC）による単独事業「米山基金」設立当初から、この事業の発展に尽くした巨星は、悲願であった財団法人設立をその目で見ることなく、世を去りました。

小林氏の後任には副委員長から田誠氏（東京RC）が就任。一同は悲しみを原動力に変え、財団法人設立に向けて全力で動き始めました。



小林氏から委員長を引き継いだ田氏

主務官庁である文部省からの内諾を得て、財団法人ロータリー米山記念奨学会の設立発起人総会が東京の帝国ホテルで開催されたのは、1967年2月。日本の新学期である4月には、晴れて財団法人として奨学生を迎

えたいとの願いが込められていました。

ところが、認可にはさらに道のりを要しました。文部省が基本財産の運用収入など安定財源を求めたのに対し、当時の彼らの提案が、運営資金のほとんどを毎年の寄付金収入に依存するという、一見して不安定なものだったからです。

5月22日付で文部大臣あてに提出された文書には、米山記念奨学事業が全国ロータリークラブの合同事業として推進されており、財団法人の認可後も「ロータリー米山記念奨学会に対して行われてきた全国的寄付は継承され継続すべく確信します」として、普通寄付金により毎年2,200万円以上の収入が確実に見込める、と力説しています。彼らの粘り強い説得に対し文部省は、普通寄付金の確約を国内全クラブからもらうことを条件に、設立許可へ向けて動き始めました。

悲願の財団法人設立！

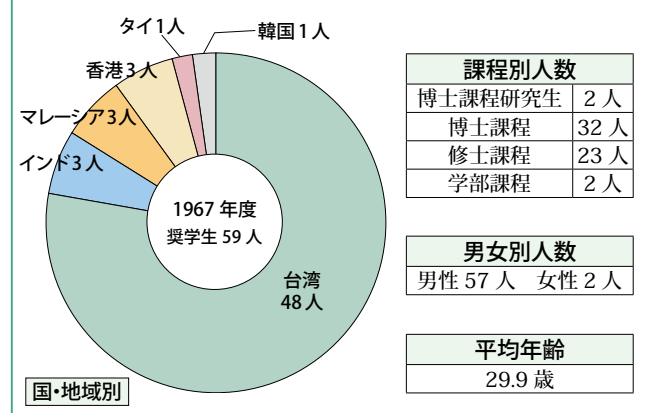
1967年7月1日、ついに財団法人ロータリー米山記念奨学会が誕生。基本財産3,000万円、設立発起人代表でもあった田氏が理事長に就任したほか、副理事長、専務理事、常務理事、理事、監事に総勢30人が全ロータリー地区から選ばれ、初代役員として着任しました。

米山基金設立から15年を経て実現した「悲願の」財団化。なぜ、それほどまでに財団法人設立にこだわったのでしょうか。

基金設立時からこの事業の拡大に尽力した東京RCの穂積重威氏からは「東京ロータリー倶楽部の名声を世界に博する為めにも、この事業は我が倶楽部で続けたい心持も致します」（1955年）と、先駆者としての自負や名誉心をうかがわせる発言も見られます。

一方で、基金創設当初の志——「米山梅吉翁の遺徳

1967年度当時の米山記念奨学生



をたたえる“無形の金字塔”に「将来はフルブライト奨学金のように大規模なものとして国際親善に尽くしたい」といった創始者たちの夢のたすきを、一人ひとりのロータリアンが受け継いでいったのです。夢の実現のためには単独クラブの事業ではなく、国内全クラブの合同事業へと発展させること、さらには法人化によってその基礎を固める必要があったのです。当時の設立趣意書には、次のように書かれています。

「(前略) 今や在日全ロータリークラブの合同事業となり、国際留学生に対する奨学金の支給を通じて、所期の目的たる国際理解と親善にも多大な成果を収めつつある、ロータリー米山記念奨学会の事業と財産を継承し、法人化によってその基礎を確立し、今後一層奨学事業の発展を期するために設立されるものである」

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL：03-3434-8681 FAX：03-3578-8281

Eメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp

* よねやまニュース *



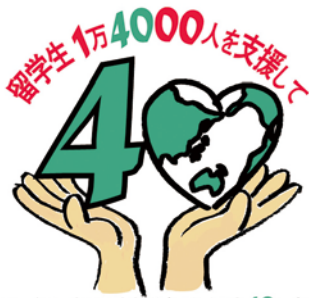
子どもたちにラオスの遊びを教えるワンマニさん



ターラカーさんはスリランカの生活文化などを紹介

小学生にスリランカ／ラオスの文化を紹介

米山奨学生のジャヤトリ・ターラカー・ビジェラトナさん（スリランカ／坂戸RC）とワンマニ・チャンニャケムさん（ラオス／東京府中RC）が、12月13日、東京都板橋区の小学校の国際理解教育プログラムに参加。外国人講師として90分にわたって母国の生活文化や子どもの遊びを紹介するとともに、児童たちとの交流を楽しみました。「事前にスリランカのことを調べていたそうで、次々と手を挙げて質問してくれたことに驚きました」とターラカーさん。ワンマニさんも「子どもたちが熱心にラオスの文化を知ろうとする姿を見て、とてもうれしかったです。ラオスの小学生にも日本の文化を紹介できたらいいと思います」と、今回の経験から得た喜びを語りました。



ロータリー米山記念奨学会 財団設立40周年

よねやまの歴史をたずねて⑤

発展の礎を築く

—— 米山カウンセラーと米山功労者の制定 ——

財団法人となっても、しばらくの間は不安定な運営体制にあったロータリー米山記念奨学会。このままではいずれ危機に瀕すると一人のロータリアンが立ち上がり、事務局を引き受けて事業の基礎固めにまい進みます。今回は、事業の充実と発展の礎を築いた1970年代の“よねやま”を取り上げます。

組織として独り立ちのとき

悲願の財団化を果たし、新組織になってからも、米山記念奨学会の運営に目立った変化はありませんでした。事務局は、相変わらず東京ロータリークラブ（RC）の事務所に間借りして置かれ、専任スタッフもない状態が続いていました。

1969年8月、法人化後2年を経て、事務局の開設がようやく具体化します。翌年7月に東京・大手町に竣工予定のタイムライフビル（現・三菱総研ビル）に1室を借りる見通しがつき、初代事務局長には、常務理事の塩原禎三氏（東京RC）が就任する運びとなりました。

人と場所を得て、ようやく米山記念奨学会は、組織として独り立ちのときを迎えたのです。

パイプをつなげ“血の通った”奨学事業を

いつまでも片手間の体制では大変なことになると、「軌道に乗るまで」の約束で事務局を預かることを申し出た塩原氏ですが、予想以上の膨大な事務量に驚きあきればかりでした。しかし同時に、「動かすことによって、米山奨学事業の将来性は、想像以上に大きなものであることを発見した」と身の整理をつけて、しばらくの間、米山奨学事業に専念する覚悟を決めました。

この事業は奨学生、指導教官、世話クラブ、そして全国のロータリークラブが一体となって初めて成果が得られるもの。この奨学事業の前身である、東京RCの単独事業「米山基金」のころから、米山奨学事業に携わってきた塩原氏は、その成否の鍵を的確につかんでいました。

「（前略）もし、そのまゝに放置されたとするならば、米山奨学生はたゞ奨学金を受けるだけ、世話クラブは奨学金を、月一回手渡すだけ、指導教官は年一回奨学生募集に際して推薦状を書くだけに止まり、三者の間には、

事業の基礎固めに尽くした塩原禎三氏



数少ない例外を別とすれば、血が通うことなく終るであろう。それは又、ロータリーと米山奨学事業を疎遠にし、奨学会は何をしているのだとの非難は、各地ロータリークラブの不満となって、その離反をすら予想されるものであった」（月刊『よねやま』第5号、1970年3月発行）

そうなる危機を未然に防ごうと、塩原氏が全力を傾けたのは、この当事者間に密接な連絡の道をつけること。皆で考え、皆で動くために、意思の疎通を図り、情報を交換するためのパイプを敷くことでした。

まず重視したのは広報でした。不定期発行の機関誌『よねやま』を月刊にし、現役の奨学生や米山学友、役員やガバナー、世話クラブのロータリアンたちの投稿を掲載し、全クラブへの配布を始めたのです。少ない人員で、20ページにも及ぶ機関誌を毎月発行することが、どれほどの苦労だったか。しかも、奨学生の投稿の一つひとつに、塩原氏はコメントを添えたのです。「われわれは、常に批判と異見を歓迎することを知ってほしい」と、奨学生からの批判的な意見も、そのまま掲載しました。

こうして、全国のロータリアンに奨学生や学友の生の声が届けられました。同時に、この事業にかかわるロータリアンの思いを彼らに伝える道ができ、両者の間に徐々に血が通い始めました。

「米山カウンセラー」の誕生

このほかにも、奨学生とロータリアンとの結びつきを強めるための取り組みとして、1971年4月から、奨学生一人ひとりに専任のロータリアンが付く「米山カウ

セラー制度」が実施されました。

実際には、それまでも多くの世話クラブで、国際奉仕委員長などが奨学生の世話役となり、例会出席のときの話し相手になったり、ほかの会員に紹介したり、自宅に奨学生を招いたりといった親身な交流が行われていました。それを正式に制度化し、奨学会が「米山カウンセラー」を委嘱することによって、世話クラブとしての任務に対する自覚を高め、ロータリアンと奨学生との間に心と心の交流が生まれるよう、後押しするのが狙いでした。

ここに、米山奨学事業の核として、「世話クラブ・カウンセラー制度」が整い、単なる経済的支援に終わらない“心を育てる国際奉仕”が確立しました。

表彰制度で事業への関心を喚起

会員増と経済の発展に加え、これら一連の努力の成果もあってか、米山記念奨学会に寄せられるクラブや個人からの寄付金は、年々増加の一途をたどりました。

これを受けて1972年12月の理事会では、特別寄付金の累計が30万円に達した個人を、「米山功労者」として表彰する制度が制定されました（2003年7月からは、累計10万円以上での表彰に改定）。表彰制度は以後も拡充され、少しずつ改定を重ねながら、米山奨学事業への関心を喚起するツールとして、定着していきました。

その後、1978年に米山記念奨学会の公益性が認められ、寄付金に対して税の控除が受けられるようになると、特別寄付金はさらに飛躍的な増加を遂げ、普通寄付金に代わって、事業を支える主たる収入となります。

今日、日本の民間助成財団の中で第1位の事業規模を誇るまでになった米山記念奨学会ですが、表彰制度と税制面での恩典は、事業の発展に欠くことのできない、



特集にも工夫を凝らした月刊『よねやま』

大きな役割を果たしたと言えます。

発展への願いを次に託して

激務を押して、これら諸制度の道筋をつけた塩原氏は、1975年の秋、病に倒れ急逝します。彼もまた先人から夢のたすきを受け取り、さらなる発展への願いを次に託して、“よねやま”の歴史の舞台から去っていった一人でした。

「連絡が密になり、関係者の間に共通の場が出来、有機的活動が可能になれば、米山奨学事業は、一人で成長し、所期以上の目的を達することが出来よう」（既述の月刊『よねやま』第5号）

塩原氏の願い通り、米山奨学事業はやがて成長期を迎えて、発展と拡大の途についたのです。

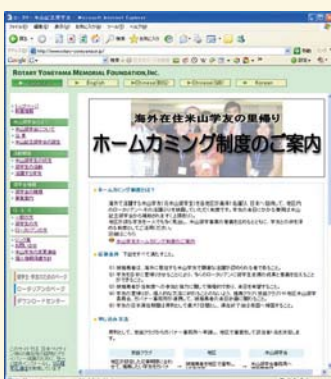
ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または“よねやまだより”についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281

Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

* よねやまニュース *

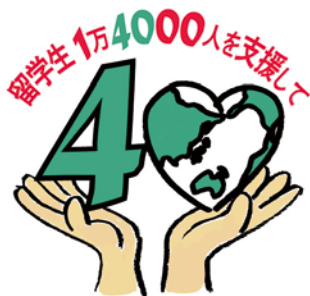


詳細は米山記念奨学会のHPで

米山学友を日本に招待 ～米山学友ホームカミング制度～

ロータリー米山記念奨学事業により、これまでに1万人以上の日本で学ぶ留学生が奨学金を受け、巣立っていきました。「留学生を支援したのはいいけど、その後どんな活躍をしているの?」。これは、多くの方々が抱く疑問です。

このたび、当奨学会が新設する「米山学友ホームカミング制度」は、かつて世話をした奨学生（米山学友）に第2の故郷・日本へ里帰りしてもらい、自クラブのみならず地区全体の“宝”として、絆を深めてもらおうという制度です。学友の来日にかかる費用は米山記念奨学会から補助（上限額あり／1地区につき毎年1人）されます。米山学友の“今”を伝えることは、寄付の成果と喜びを実感するとともに、米山記念奨学事業の意義を広める絶好の機会です。応募の詳細は、米山記念奨学会のホームページ（<http://www.rotary-yoneyama.or.jp/>）をご覧ください。



ロータリー米山記念奨学会 財団設立40周年

よねやまの歴史をたずねて⑥

友情を柱に発展

—— 支援対象者の拡大と学友会の誕生 ——

バブル景気に沸いた1980年代。今回は、この時代の米山奨学事業を特徴づける3つの出来事をご紹介します。1つは非ロータリー所在国の留学生へ門戸を開いたこと、2つ目は元米山奨学生たちの学友会が相次いで設立されたこと、そして、“よねやま”の国際貢献が国際ロータリー（R I）会長から称賛されたことです。

ロータリーのない国へ門戸を開く

1980年代は、日本へ来る外国人留学生の数が飛躍的に増えた時代でした。その背景にあったのは、1983年、当時の中曽根内閣が発表した「留学生受入れ10万人計画」です。これは、留学生政策が重要な国策の一つであるとして、当時1万人程度だった留学生を、21世紀初頭には10万人へ拡大するというものでした。

こうして外国人留学生、特に私費で来日する苦学生が増えるにつれ、米山奨学金への需要と期待は高まってきました。と同時に、「ロータリー所在国からの留学生」に限っていた支援対象を広げ、「中国などロータリー所在国以外からも受け入れるべき」との要望が次々に寄せられるようになったのも、80年代の特徴でした。

折しも、日本から出た2人目のR I会長、向笠廣次氏（1982－83年度）が掲げたテーマは、「人類はひとつ 世界中に友情の橋をかけよう」。世界中の人々が友情の懸け橋で結ばれたときにこそ、平和が実現すると訴えた向笠氏は、1982年の国際協議会、およびダラス国際大会における講演で、日本が生んだ米山記念奨学会の功績を紹介しながら、「非ロータリー国からの学生を除外せぬように定款を改正することを考慮中です」と述べています。



世界各地からの留学生が選考試験に挑戦

1986年には、大阪の第266地区（当時）の地区大会で米山記念奨学会に対し「ロータリーが所在しない国からの留学生にも奨学金を支給できるよう拡大を望む」と、特別決議がなされるなど非ロータリー所在国、特に中国に対して門戸を開くよう、要望が相次ぎました。

当初は、外交問題に発展しかねないと慎重な姿勢を崩さなかった米山記念奨学会も、世界情勢の変化や、R Iの方針転換に背中を押される形で、ついに1989年、中国、キューバ、ミャンマーなど、以前にロータリーが所在していた国からの留学生に対し門戸を開いたのです。

元米山奨学生の結束

80年代はまた、“元米山奨学生の同窓会をつくろう”という機運が国内外で本格化した時期でもありました。

台湾では、1971年に早くも結成が発起されたものの、当時は結社の自由が制限されており、その後立ち消えになっていました。しかし、1980年に当時監事だった黒澤張三氏（東京南RC）らが訪台し、学友を集めて連絡態勢を整えたことをきっかけにその火が再燃。栃木・茨城の第255地区（当時）で独自に結成された同窓会組織、「米山奨学生友の会」の支部が台湾にできたことも追い風となり、1983年1月、「扶輪米山会（ロータリー米山会）」の創立式典が台北で開催されました。今では29ある学友会のなかで唯一の社団法人として、活発な活動をしています。

一方、日本国内でも以前から同窓会組織の必要性が指摘されていましたが、台湾での成功を受けて準備委員会が発足。米山記念奨学会の学友委員として助力したのは清水長一氏（東京RC）でした。清水氏は日本で最初のロータリー国際親善奨学生であり、帰国後、R Iからの要請を受けた塩原禎三氏（後の米山記念奨学会初代事務局局長）らの働きかけで、財団奨学生の同窓会を設立した人物です。その清水氏が、今度は米山学友会設立のため

に力を注いだという事実は、不思議な巡り合わせといえましょう。そして1985年11月、「米山奨学生学友会(関東)」が発足。その後、関西、北関東、西日本と、立て続けに4つの学友会が国内に誕生しました。

韓国にも動きがありました。1979年のR Iアジア地域大会の際に、在韓学友による「親睦会」が結成されたものの、政情不安のため消散。しかし、その10年後、1989年ソウル国際大会2日目の夜、60人を超える学友たちが集まり、韓国を訪れた湯浅恭三理事長(当時)をはじめ米山関係者のため、歓迎会を開いてくれたのです。この会の実行委員長は、のちに米山学友初のガバナー(第3650地区、1997-98年度)となる林隆義氏^{リンユンウィ}でした。韓国で国務大臣となった学友が「韓国の若者が皆さまの協力で夢を伸ばし、今日の発展に大きく貢献している」と述べるなど、学友たちから口々に米山奨学事業への感謝と称賛を贈られ、一行は感動に包まれました。このとき、同窓会結成の申し合わせがあり、同年6月「韓国ロータリー米山記念奨学学友会」が設立されました。

R I 会長からの称賛を得て

こうして、米山奨学事業が多くの奨学生を輩出し、年間の寄付金が10億円に達する事業へと発展するにつれ、R Iからもその存在を認められるようになりました。

前述の通り、向笠R I元会長が1982年の国際協議会と国際大会で米山奨学事業について言及したことは、日本のロータリアンたちを感激させました。また、1984年3月には、ウィリアムR.ロビンズR I元会長(1974-75年度)から「日本の多くのロータリアンに対する感謝のしるしに」と、米山奨学会へ500ドルの小切手が贈られました。そして1985年、ソウルで開催された韓日親善会議の講演で、カルロス・カンセコR I会長は



韓国で元奨学生による歓迎会を開催

次のように述べました。それは、今や日本最大の民間奨学団体へ成長し、日本の全ロータリアンが支援する事業としての誇りを抱いていた関係ロータリアンにとって、「待ちに待った」言葉でした。

「韓国及び日本においては今迄にしっかりとした奉仕の伝統が築かれています。それは多くの分野に分かれています、その内の一つは教育の実践です。1953年以来日本のロータリアンの支持する米山記念財団は、既に日本に学ぶ46か国の3,700名(奨学会注:延べ人数)の大学卒業生に奨学金を提供しています。(中略)このような両国の組織機構は高度な教育関係の交流を奨励する手助けをしており、ロータリー財団にとって実際に役立つパートナーであります」

拡大と発展を遂げた80年代。その余韻を残し、90年代が幕を開けます。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281
Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

* よねやまニュース *

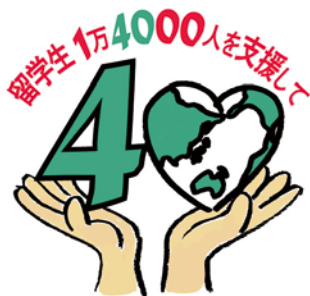


感動の講演を行った楊さん

人生を変えたロータリー —— 奨学生が感動の講演 ——

「ロータリーは、人のことに無関心だった私を変えてくれました」。小雨降る2月3日の神戸、はるばる福島から第2680地区(兵庫県)の米山奨学セミナー^{ヨウシュレイ}に招かれた米山奨学生の楊珠玲さん(中国/福島RC)は、講演の中でこう述べました。

中国の学校に行けない子どもたちのために、生まれて初めての寄付をしたとき、与えられた子どもたちよりも、自身が大きな幸せを味わっていることに気づいたという楊さん。靖国神社参拝や反日デモなど、日中両国間の抱える問題を避けて言及し、「将来は母国の大学で教壇に立ち、日本人の不戦の心を中国の若者に伝えたい」と語りました。会員の中には目を潤ませながら聴き入る人もいて、講演後、「ここまで日本を理解してくれる奨学生がいるとは思わなかった」「米山奨学生に対する認識を改めた」と、感動の声が数多く聞かれました。



ロータリー米山記念奨学会 財団設立40周年

よねやまの歴史をたずねて⑦

夢果たすも苦境に臨み

—— 過去最大の奨学規模と寄付金の低迷 ——

1990年代初頭のバブル崩壊後、日本経済は“失われた10年”と呼ばれる長期不況に突入します。日本のロータリーの急速な発展に歩調を合わせて、1,000人超の奨学規模に成長した米山記念奨学会も苦境に立たされます。今回は、事業の黄金期から一転、寄付金低迷に苦しむことになった“よねやま”の90年代を取り上げます。

年間奨学生数 1,000人を突破

米山記念奨学会にとって、1990年代の幕開けは希望に満ちたものでした。80年代後半から、“Japan as No.1”ともてはやされた好調な経済のもと、日本のロータリー会員数は毎年数千人単位で増加し、1991年には12万人を突破。米山記念奨学会の寄付金収入も、その勢いを反映して、毎年約2億円ずつ増加していました。

1991年にはバブル景気が終わり、経済状況は急速に悪化しましたが、すぐにその影響が現れたわけではありませんでした。実際、伸び率こそ鈍化したものの、1996年までは会員数・寄付金ともに堅調に推移し、ロータリーの中にも、米山記念奨学会の中にも、悲観的な見方はあまり広がらなかったのです（グラフ参照）。

収入増に伴い、基本金や積立金を積み増して、財政基盤が整えられると、米山奨学金を一層魅力的なものにして、より多くの優秀な人材を支援するための取り組みも始まりました。まず、1989年7月には、国費奨学金に近い水準に奨学金額が引き上げられ、奨学生採用数についても、1992年には、前年から一挙に224人増やし、

820人としたのです。1996年には会員数が13万人を超え、米山記念奨学会にも過去最高となる21億円近い寄付金収入がありました。その実績をもとに、1998年の採用数は、1,100人の大台に乗せたのでした。

タイからのたった一人の奨学生から始まったこの事業が、1,000人を超える奨学生を迎える——。それは、まさしく事業の黄金期と呼べるものでした。

続々と現れる学友の成果

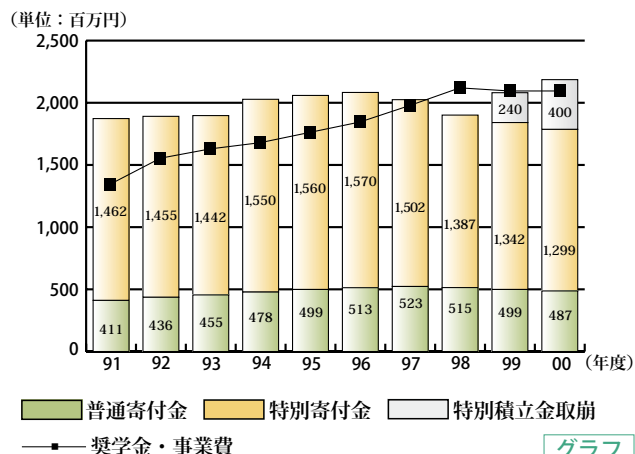
90年代は事業規模だけでなく、学友の活躍も目覚ましいものでした。

台湾では、戦後50年の節目となる1995年、帰国した米山学友が中心となって新クラブが設立されました。台北東海ロータリークラブ（RC）は、日本語を公用語とする珍しいクラブであり、創立会員57人のうち13人が米山学友。その創立会長には、台湾の米山学友会「扶輪米山会（ロータリー米山会）」の初代理事長で、有数の実業家として活躍する徐重仁氏（1976—77年／平塚RC）が就任しました。同年4月14日の認証伝達式には、米山記念奨学会から当時の副理事長である増田房二氏が出席。式典にあたり、同クラブから米山記念奨学会への感謝の意を込め50万円が寄付されたのも、日本の関係者を大いに感激させました。

韓国では、米山学友初のガバナーが誕生しました。韓国米山学友会の初代会長も務めた林隆義氏（1977—78年／京都西南RC）は医師として、ロータリアンとして、当時のごみ集積場・ソウルの蘭之島^{ナムジョン}でごみ処理に従事する貧しい人々の無料診療や、カザフスタンの核実験の影響で白血病に侵された子どもたちの治療に尽力し、1994—95年度に国際ロータリー超我の奉仕賞を受賞。1997—98年度第3650地区ガバナーに指名されたのです（本誌2005年11月号横組みP32参照）。

バングラデシュでも、米山学友会（関東）の初代会

◆ 寄付金と奨学金・事業費推移(1991—2000年度) ◆



認証状を受け取る徐重仁氏（中央）



長を務めたイスカンダール・アメッド・チョウドリ氏（1970 - 72 年／東京銀座 R C）が、故郷のベタギ村に学校を造りたいと日本のロータリアンに支援を呼びかけたところ、第 2770 地区（埼玉県南東）がこれに応え、地区の世界社会奉仕（W C S）プロジェクトとして協力。1996 年に、ロータリー・ベタギユニオン・ハイスクールが設立されました。6 歳からの 10 年制で、地域の中核を担う教育機関として、現在も 800 人を超える子どもたちが学んでいます。

積立金を取り崩して奨学人数を維持

このような輝かしい成果の一方で、1996 年をピークに会員数はついに減少に転じ、米山記念奨学会への寄付金も下降線を描き始めました。加えて、1997 年にはアジア通貨危機が起こり、在日留学生の大半を占めるアジアからの学生の生活を直撃しました。同年 9 月の長期金利は 1.9% を割り込み、「産業革命以降、平時の先進国では最低レベル」と称される低水準で、基本財産の運用益で事業費を賄う多くの奨学財団は、事業の縮小を余儀なくされたのです。

毎年の寄付金で事業を行う米山記念奨学会は、助成財団の中でも特異な存在であり、その支援を必要とする留

学生数はますます増えていました。

寄付金が低迷する中、奨学金額を減らし、より多くの人を支援するか、奨学人数を減らすかが議論されました。金額を減らせば、優秀な学生は集まらなくなるかもしれない、民間第一位の奨学事業としての責任を考えれば、人数を減らすことも難しい選択でした。

米山記念奨学会理事会が出した結論は、寄付金減少に備えて積み立ててきた特別積立金を取り崩し、採用数を維持すること。1999 年、2 億 4,000 万の積立金取り崩しにより、約 1,100 人の採用数を維持したのです。

初の基礎調査を実施

寄付金が減少する今こそ、事業の目的と使命を再確認し、制度の充実や組織運営の見直しを図る必要があると、1999 年 8 月、ロータリアンと大学関係者を対象に、初の大規模なアンケート調査が実施されました。

そこから見えてきた事業の目的は、「前途有望で優秀な留学生を支援し、その母国の発展や、日本との平和で緊密な関係の構築に寄与する」こと。また、大学関係者からの回答では、「世話クラブ・カウンセラー制度は必要」との、高い評価の声が寄せられたのです。

ロータリー内外に対して、事業理解を推進するためには、ロータリアンと奨学生がいかに良い交流関係をつくれるかにかかっている——。この調査で得た確信を基に、新世紀に向けての取り組みが始まりました。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL：03-3434-8681 FAX：03-3578-8281

Eメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp

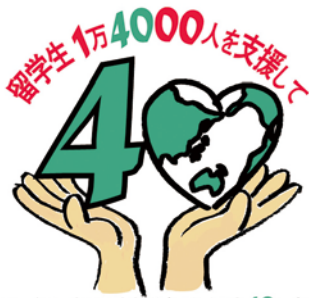
* よねやまニュース *



日本語学校を卒業、笑顔のナムさん

第 1 期現地採用奨学生ナムさんが大学院に進学

ベトナム現地採用奨学金の第 1 期生、タイ・ヴァン・ナムさん（千里 R C）が 4 月から大阪大学大学院博士課程に進学し、母国の環境基準に関する研究に励んでいます。ナムさんは昨年 6 月に来日。日本語を習得するため大阪日本語教育センターに通い、大学院の入試や日本語能力検定試験の重圧で体調を崩しながらも懸命に勉強に取り組み、3 月に迎えた同センターの卒業式では、クラスの代表として壇上に立ちました。また、1 月にはベトナムで第一子が誕生。第 2660 地区の有志ロータリアンやカウンセラーの応援で帰国がかない、出産に立ち会うという大きな喜びを得ました。生まれた女の子はニュット・ヴィと名付けられました。ニュットは「日本」、ヴィは「ベトナム」の意味で、両国の交流が今後ますます進んでいくように、というナムさんの願いが込められています。



ロータリー米山記念奨学会 財団設立40周年

よねやまの歴史をたずねて⑧

夢のたすきを、あなたに

——制度改編と財団40周年を迎えて——

本年11月号からお届けしてきたシリーズもいよいよ最終回です。今回は、21世紀に入ってから歩みをたどります。寄付金低迷によって規模の縮小を余儀なくされながらも、民間では依然として国内最大の奨学団体である米山記念奨学会。日本全地区によるロータリーの多地区合同奉仕活動として歩む“よねやまの今”を紹介します。

苦渋の決断

1996年度の21億円をピークに下降に転じた寄付金は、2000年以降も歯止めがかかるとはありませんでした。多いときには1億円にのぼる寄付金が毎年減り続け、「このままでは年間採用数1,100人どころか1,000人さえ維持できない」と、関係者たちは危機感を募らしました。2001年秋には文部科学大臣から「留学生受入れ制度100年記念留学生交流功労者表彰」を受賞。多年にわたる功績を政府から認められた喜びに沸いたばかりでした。ビザ緩和政策によって急増した私費外国人留学生のためにも、民間最大の奨学団体として採用数1,000人を下回ることはいけません。

特別積立金を取り崩して不足分を補いながらも、次々と対策が講じられました。事務局の経費節減はもとより、タスクフォースを設置して寄付金増進のための打開策が幾度も検討されたほか、各地区の奨学生採用数を寄付金の実績と比例させることで寄付への意欲を高める工夫がなされました。さまざまな形で提出していた補助費も見直され、苦しい財政状況が繰り返し訴えられました。

しかし、寄付金回復への祈りは実らず、2005年、ついに採用数を年間1,000人から800人とし、奨学金月額、奨学生の優秀性を最低限保つことができるであろう、大学院生14万円（1万円減）、学部生10万円（2万円減）とする苦渋の決断が下されたのでした。

多地区合同奉仕活動として

米山記念奨学事業は、ロータリーが目的とする“国際理解と平和の推進”を具現化した活動でありながらも、日本のロータリアンが生んだ独自のプログラムであり、国際ロータリー（R I）やロータリー財団の提唱によるものではありません。そのため、かつて向笠廣次R I会長やカルロス・カンセコR I会長などから称賛の言葉



奨学生と交流を深めるロータリアン

を贈られたとはいえ、R Iの公式プログラムに「米山」の文字はなく、「財団奨学生との“車の両輪”どころか、^{ままこ}継子扱いされている」と嘆く声もありました。

しかし、日本の歴代R I理事の尽力により、2002年、ビチャイ・ラタクルR I会長や日本のパストガバナー、ガバナーが一堂に会するゾーン研究会（現ロータリー研究会）で、初めて米山記念奨学会による提言と分科討論会が行われました。

さらに、2004年11月のR I理事会では米山記念奨学会が議題に上り、「多地区合同奉仕活動」（『手続要覧2007』P33～34参照）の手続きを進めることを前提としてロータリー徽章の使用を認める、との決議がなされたのです。決議文は、「奨学金の授与を通し世界理解と平和に貢献されている財団法人ロータリー米山記念奨学会を賞賛する」という言葉で締めくくられています。

昨年、34地区すべての同意書がそろい、日本全地区によるロータリーの多地区合同奉仕活動として、手続きが完了しました。

改革を重ねて

事業の黎明期^{れいめい}には、古沢丈作氏、穂積重威氏、小林雅一氏、田誠氏、塩原禎三氏といった、強いリーダーシップをもつロータリアンたちが事業をけん引し、夢のたすきが引き継がれてきました。しかし、名実共に日本全地

区に及ぶ活動となり、事業が拡大するにつれ、ロータリアンの総意をくんだ舵取りは難しくなりました。そこで、1999年に続き、2003年にはさらに本格的なアンケート調査を実施。多くのロータリアンが参加するフォーラムを開催して議論の場を設けるなど、ロータリアンが事業への参加を実感できる“よねやま”へと、変革を図りました。それが「2006年度制度改編」です。

まず、事業の使命は「将来、日本と世界とを結ぶ懸け橋となって国際社会で活躍し、ロータリー運動のよき理解者となる人材を育成する」ことであると確認されました。そして、この使命にかな適うような人物面・学業面で優れた人材であれば、経済的に困っているかどうかは問わない、いわば、質を重視した奨学制度とすることが一層浮き彫りとなりました。

また、台湾と韓国を対象に2000年から始まった渡日前採用型の奨学金制度をさらに発展させ、経済的な理由から日本に来ることさえできない優秀な学生を海外で発掘する「現地採用奨学金」が新たに設置されました。現在、ベトナムを対象に試行中ですが、日本にすでにいる留学生の中から選ぶ従来の採用方法とは異なるものであり、国籍バランスや途上国の教育支援という観点から、大きな期待が寄せられています。

そのほか、地区の裁量で大学・大学院生以外の留学生を採用できる「地区奨励奨学金」の新設、医療費補助・カウンセラー活動補助費廃止などが実施されました。

財団設立 40 周年を迎え

2007年7月1日、ロータリー米山記念奨学会は財団設立40周年を迎えました。今日まで事業を続けられたのは、ロータリアンたちの情熱があったからです。米山記念奨学会の故・近藤正夫常務理事は、1983年10月、

第250地区（現・第2500地区）米山奨学委員会主催の会合において、次のような言葉を遺しています。

「事業内容に全く関心がないのに、ただ唯おつき合いとか、その他別の理由で寄付しても、それでは心が躍りません。（中略）『無関心だが金だけはだすよ』という人も出てきます。

それでも大変有難い、よい奉仕なのです。ただし無関心の方が少数の場合です。もし大多数がそうになったら、事業は形骸化して行くことになります。事業主体としても、けいがいお金だけ寄付していただければ万事OKとは参りません。命が燃え続けなければ、やがてその事業は消えてしまうでしょう」

これまでに積み残した課題もありますが、“よねやま”はこれからも皆さんの声に耳を傾けながら、事業のさらなる進展を図っていきます。それを支えるのは、皆さんです。半世紀にわたって受け継がれてきた夢のたすきは、今、皆さんの手にあるのです。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または“よねやまだより”についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281
Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp



世界で活躍する米山学友、母国でロータリアンと井戸掘り

* よねやまニュース *



授賞式での朴さん（中央）と半田夫妻

米山学友の著作が大佛次郎論壇賞に

韓国・世宗大学日本文学科副教授の朴裕河さん（1987 - 88年／浦和北RC）の著書『バクキュハ和解のために—教科書・慰安婦・靖国・独島』（2006年平凡社刊）が、第7回大佛次郎論壇賞に輝きました。これは、2005年に韓国で出版した本の日本語訳版で、経済・文化交流が進んでなお難しい日韓関係を根本から見直し、誰もが避けて通らなければならないこれらの問題について、両国の認識のずれを狭めようと試みたものです。1月29日に東京で行われた授賞式で、「私は日本を信頼し続けていきたい」と述べた朴さん。世話クラブのロータリアンとの出会いも、そのような信頼をはぐくむ基盤の一つになったといいます。「そう言えるようにしてくださった方々に感謝の言葉をじかに聞いていただきたい」と、授賞式には当時のカウンセラーの半田昭雄バスターガバナーご夫妻も招き、栄えある受賞の喜びを分かちあいました。